

第14回肩関節機能研究会のお知らせ

日 時：2019年11月30日（土）午後2時から
場 所：千代田ファーストビル西館 3F カフェテリア
参加費：5000円 テーマ：「腱板断裂をどう解釈するか」
参加人数 100名先着

腱板断裂の論文を「rotator cuff tears」でPubMedから検索すると、4年前4800編であった文献数が現在7931編、つまりこの4年間で登録論文が3100編増えました。腱板断裂に興味旺盛な世界中の研究者が、膨大な論文を毎日投稿しています。これらの論文を読むと腱板断裂を理解できるか、（私トライしましたが）まったく理解できず、むしろ迷路に迷い込むだけでした。しかし、最近の流れをまとめると、(1)断裂サイズが大きければ症候性になりやすいという2013年までの論調が、2014年以降痛みや機能障害と断裂サイズ・様式とはまったく関係ないに変化、(2)2013年以降、腱板断裂に対する3か月の理学療法で十分な効果を得られる、(3)保存治療と手術の成績を比較すると、短期的には差がないが長期的には手術例がやや良好、(4)保存治療が成功しても腱板断裂サイズは拡大し年齢が若い程再度症候性になりやすい、(5)修復腱板が再断裂した群と修復成功群を比較すると成績にほとんど差はない、となります。

「(1)断裂サイズと症状とは関係ない」と「(5)再断裂しても成績に差はない」の2点から、腱板断裂の症状は断裂とは関係なく、断裂以外の病因(病態)の存在を示唆します。私たちは55例の症候性腱板断裂を調査し、41例に肩関節内転制限が、10例は関節外因子（肋骨の運動制限）、4例が筋力低下・求心位保持機能の破綻でした。つまり、腱板断裂の90%以上が拘縮肩でした。烏口上腕靭帯の上部の肥厚、棘上筋の滑走障害が病態として考えられました。以上から、大多数の腱板断裂を拘縮肩と解釈できます。腱板断裂を再考するために、「腱板断裂の疫学」を山本敦史先生に、「腱板断裂：最近の流れと肩関節内転制限」を矢野雄一郎先生に、「腱板断裂の理学療法：何を治療するのか、その効果は」を千葉慎一先生に、「腱板断裂の手術適応と術後成績」を石毛徳之先生に講演していただきます。今年は午後2時から講演会を開始しディスカッションに多くの時間を割く予定です。腱板断裂に対する新たな視点を提案しますので、振ってご参加ください。昨年の肋骨の文献集同様、腱板断裂の文献集は研究会の参加者に後日メール配信いたします。

2019年10月30日

肩機能研究会事務局 浜田純一郎

Time table

14:00

開会の辞

浜田純一郎

14:05-14:55

1. 「腱板断裂の疫学」

ぐんまスポーツ整形外科院長 山本敦史先生

座長: 塩崎浩之先生

立花 孝先生

15:00-15:55

2. 「腱板断裂: 最近の流れと肩関節内転制限」

とちぎメディカルセンターしもつが 矢野雄一郎先生

座長: 鈴木一秀先生

山口光国先生

16:00-16:50

3. 「腱板断裂の理学療法: 何を治療するのか、～私の工夫～」

ウエルケアわきた整形外科 千葉慎一先生

座長: 遊佐 隆先生

浜田純一郎

17:00-17:50

4. 「腱板断裂の手術適応と術後成績」

松戸整形外科病院 院長 石毛徳之先生

座長: 名越 充先生

斎藤 崇先生

18:00-19:30

総合討論

司会: 永澤雷太先生, 山口光國先生

19:30

閉会の辞

筒井廣明

会場案内

ジョンソン・エンド・ジョンソン 千代田ファーストビル3F カフェテリア
 〒101-0065 東京都千代田区西神田3-5-2

